
とある高位聖職者の独り言～創世記2章18節

里奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある高位聖職者の独り言―創世記2章18節

【Nコード】

N1141B

【作者名】

里奈

【あらすじ】

夕暮れ時の教会執務室。先ほど来ていた弟子との会話を思い返しながら、独りでお茶の続きを嗜む師の姿。人はどうして他の人を求めるのだろうか、という弟子からの問いに、師は聖書の一節を思い出す。

静かな、夕時であつた。

神の家、すなわち、教会の二階にある司祭執務室。そこを自室代わりにして本を読んでいた部屋の主の所に、弟子がやって来たのも、出て行つたのも、つい先ほどのことであつた。

机の上には、皿の上に整然と並ぶさつまいものの色の滲むグラシン紙。巷の噂を聞いた弟子が、自分のために差し入れてくれたスイートポテトのあつた跡であつた。

それを思い出したかのように一瞥すると、椅子の上の青年は——ローマンカラー姿のこの部屋の主は、眼鏡を人差し指で押し上げる。スイートポテトの甘い香りが、今でもまだ部屋の中に満ちているかのような錯覚に陥つてしまふ。同時に、自分と同じくポテトにご満悦だつた弟子との話が思い出された。

青年は、緑のリボンでひとまとめになつた髪を、背へとゆるりと流した。

世界は、広すぎる。人はどうして、他の人を求めるのだろう——。先ほどまでは弟子と二人で、そんな話を、していたのだ。ただし師は、弟子の話を聞くばかりで、ほとんど自分の考えを述べようとはしなかつた。

聞くだけなら、いくらでも。ただし、考えるのは自分でなさい。それがこの師の、やり方であるのだから。

師なる青年はふ、と微笑むと、今更ながらに言葉を紡ぐ。

「……実は全て、当たり前のことなんですよ」

この世界が、あまりにも広大過ぎることは。人がどこかに居場所を、他の人を求めるといふことは。

聖書の言葉を思い出す。

”In principio creavit Deus caelum et terram”——父なる主・永遠の神は、まず

はじめに天と地とを造りあげた。人は、その広大すぎる地に満ちることを許された、小さくて非力な土くれにしか過ぎないのだ。神の似姿であるはずの人の、どれほどまでに物足りないことか。もし聖書から人の過ちを取り除くことができたのなら、

やれ、どれほど私達聖職者の仕事が減ることでしょうね。

紅に染まった硝子に視線を流す。苦しいほどの輝きに、青い瞳が静かに細まる。

背もたれに力を任せた時、視界の隅で鋭く瞬く光があった。

右の薬指に、水と同じ色をした、指輪。

枢機卿は左の指先で宝石を覆い隠すと、天井へと意識を逃がした。甘い、甘い、スイートポテトの季節だ。乾いた音の、風に流れ去る季節。今年、の一掃される季節。吹き抜ける寒さは孤独にも似て、大地を眠りの中へと落とし込んで置き去りにする。甘い、甘いバターの香りの散る季節。鮮やかな落ち葉は、今年の終わりへのはなむけとして、大地に向けて渡されてゆく。

溜息を吐いて、手を、伸ばした。

冷えた紅茶が、息を白く染め上げるかのようにであった。ソーサの上にカップを置き、何と無く、皿の上に残っていたスイートポテトの包み紙を拾い上げる。

「温かい紅茶が、ほしいですね」

小さく、小さく折りたたみながら、きゅっとそれをねじりあげる。皿の上に放り投げると、それは包み紙一枚の上に動きを止めた。

その隣には、同じ空の包みがもう一つ。遠慮深気に中身を食べて行った青年は、今頃長い影を引きずって、どここの電車に乗っているというのだろうか。

だから、わかっている。呼んでも彼は、自分の望みには応えてはくれない。

気の利いた青年なのだ。数年前ここに来た頃は、時機になれば代えの紅茶と菓子とを運んできてくれた彼。その心はきっと、今でも変わらない。心は変わらないが、

「ねえ——、やっぱり神様は、気まぐれなお方でいらつしやるので
しょうかねえ」

「見つけてしまったがゆえに、いつもここには、いられなくなつて
しまった。彼には今、別の居場所がある。」

ねえ、師匠。どうして人は、人を好きになるんでしょうね……。

食べかけのポテトを片手に俯いた弟子の言葉の真意を、師はよく
知っていた。弟子もカトリックの聖職者である以上、誰か一人の女
性を愛することは許されていないのだ。それでも彼は、今やその禁
に触れんばかりのところまで、一人の女性に強い想いを抱いてしま
っていた。

しかし師は、弟子を責めようとはしなかった。

私だって、よく、わかつているつもりですよ。

あまりにも広大な世界。創造のはじめが広大すぎたがゆえに、人
の背負う孤独も大きくなつてしまった。

二つある人の創造物語のうち、一方はこのようにして語っている。
神が人の孤独に気がついた時、神はこう憐れみを示したのだ。

”Dixit quoque Dominus Deus no
nest bonum esse hominem solum
faciamus ei adiutorium simile
m sui”——主なる神は言われた。「人が独りであるのは良く
ない。彼に合う助ける者を造ろう」

そうして神は、造られたもう一人の人のうちに、神を見出せるよ
うにした。人を愛することは、神を愛することに等しい。旧約時代
の後に神の子が残した福音は、人は人を愛することを通してでしか
神を愛することはできないと教えているのだから。

神は広大な世界の中に、人の居場所を人を造ることによって造り
出した。人は神とは違い、地の全てを見回すことはできない。だか
ら、自分の知っている場所に自分の居場所が無い限り、孤独に取り
残されることになってしまう。

孤独は、恐ろしい。神が救いの手を差し伸べなくてはならないほ

ど、人の心を、引きずり落としてゆく。神はそれをわかっていた。そんな神の理解があつたからこそ、今ここに自分がいて、夜になれば弟子もここへと戻ってくるのだらう。家族、という居場所に。

帰るべき場所が、必要だ。人にとっては、手に届く場所に。自分のいるべき場所が、必要なのだ。

それを痛感した神は、

……人を、甘やかしたのかも知れせんよ。

人は神のみによつて生きる。そう言つて、人の他に人など造らなければよかつたのだ。そうすれば、或いは――、

「私もこおんなに、苦労しなくてすみましたのに」

右の手を、夕日に翳す。

澄んだ水と同じ色が、空の色に染められる。

高位聖職者の身分を示す指輪は、一生をただ神のためだけに捧げることが誓つた証でもある。例えば世界の中に孤独となつた時にも、見えない神のみを愛することを誓つた証だ。他の誰からも束縛されない、自由の証でもある。

だから、自分の居場所は、この世界そのものなのだ。取りとめもなく、掴み所も無い世界そのもの。世界は無口だ。どんなに愛を囁いたとしても、風の冷たさは変わりはないのだから。

——あの子は、あの心優しい彼女と一緒に、今日はどこに行くのだらう。

「温かい紅茶が、欲しいんですけれどもねえ」

もう数時間もすれば、土産に頼んでおいたアイスクリームをもつて帰ってくるのであらう彼。食卓を囲めば、笑顔で今日の幸福を語るに違いない。

けれどいつかきつと、彼の帰るべき場所はここではなくなつてしまふ。近い将来、彼は彼の見つけた居場所に、ただいま、の言葉を微笑ませるのであらう。ここではなく、彼のために用意された、たった一つの別の居場所に。

まあ、私は一人の方が、気楽でいいのですけれどもね。

呷く代わりに、冷たい紅茶を飲み干した。空のカップを置くと、膝の上で両手を組む。

人は不思議な生き物だ、と、考えたことがあった。どうして人は自由を求めながら、誰かに縛られることを望むのでしょうか、と。どうして束縛の中に、幸福を見出すことができるのでしょうか、と。

だが、その答えはあの分厚い書物のすぐの部分に記されていた。よく目にする言葉であつたのにも関わらず、当たり前だと思い込み、読み流していた部分に明記されていた。

人が独りでいるのは、良くない。

彼に合う、助ける者を造ろう。

実に、簡潔な理由であつた。人の弱さに対して、神がこうして助けを与えた、ということではしかなかったのだ。

だから、人は居場所を求める。たとえそれが束縛になり得るとしても、自由と引き換えてでも、自由にその束縛を求めようとする。孤独よりも束縛を選び、どうあつても他の人を求めようとする。そこに、居場所を求めようとする。

ただ――、

ただ、私の場合は。

自由と引き換えにしてまで求めるべきものなど、神の他には、何も知らないのですよ。

なんて、

「いいえ、それは嘘になりますかね」

もう自分は、既に知ってしまったているに違いない。ここ、にいることが、自分にとってはどれほどの幸福であることが。

それでも、わかつている。決心はついている。もし明日にでも何かがあり、この場所を捨てなければならなくなったとしたら。自分はその神を見出す限り、全てを残してここを去ることができることは。

間違いなく、誰にも縛られず、自由な自分。神にのみ、という言葉は、最大の自由、という言葉にも等しいような気がしてならない。

ただ。

「やれ、」

……誰にも話さない本音がある。神にすら打ち明けられない、本音がある。

時折考えることがあった。

「やつぱり自分で淹れに行くしか、ないですよね」

やおら立ち上がり、ソーサごとカップを持ち上げる。窓に背を向け、部屋の戸に手をかけた。

ふと、戸を閉める瞬間に、机の上にあったスイートポテトの包み紙が気にかかった。皿の上に甘いポテトがあった頃、ほんの少しの間だけ、あの子の笑顔もここにあった。

夕暮れ色が、闇を帯びる。

枢機卿が、息を吐く。

静けさをしまいこんでおくかのようにして、青年は執務室の戸を閉ざした。

——誰にも言えない、自分にすら誤魔化している本音がある。ただ、うかつにもこぼし落としてしまった本音が、あの部屋の沈黙の中に埋もれている。

果たしてそれは、本当に幸せなことなのでしょうかねえ。

去り際にあの子を、悩ませた言葉。

けれどそう、本当は。あれは、君に向けた言葉では、ありませんでしてねえ。……、

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1141b/>

とある高位聖職者の独り言～創世記2章18節

2010年10月8日15時08分発行